

## バーバ・ムクターナンダの物語

### ヴァニ・ダールグレン

1987年の春、夫と私はグルデーヴ・シッダ・ピートゥのバーバを訪問したいと思いました。当時、私たちには2人の幼い子どもがいて、旅行することは彼らにとって難しいと思いました。そこで、夫が2週間、子どもたちの世話をしている間は私が行き、その後私が帰宅してから、彼がインドに行くことにしました。

私は、バーバの誕生日の5月の満月の直前にグルデーヴ・シッダ・ピートゥに到着しました。そして大きな喜びと共に、中庭のバーバのダルシャンへ行きました。私は、夫と私が子どもの世話を分担していること、そして私が家に戻った後に彼が来ることをバーバに話しました。

バーバはすぐに、「あなたは子どもたちを連れて来るべきだった」と言いました。これを聞いた時、私の思考は一瞬止まりました。そして唯一思い浮かんで口にした言葉は、「次に来る時に、バーバ」でした。バーバは、「次に来る時、彼らはとても年を取っているだろう」と答え、そして中庭に座っている幸せで健康そうな子どもたちを指さしました。

私は中庭に座り、バーバが言ったことを考え始めました。家族全員と一緒にアーシュラムにいることをバーバが望んだのは明らかでした。私は、どうしたら子どもたちがインドに来ることができるか考え始めました。その頃、ガネーシュプリーからアメリカ合衆国に電話をかける方法はありませんでした。しかし、アーシュラムの通りの向かい側に、アメリカにメッセージを送ることができる電報局事務所がありました。その事務所には、レバー付きの旧式の通信機器があり、交換手がモールス信号でメッセージを打ってくれたものでした。電報が海外に届くには何日も

かかりましたが、うまくいくようお願いながら、私は電報で夫に子どもたちを連れて来ることができるか尋ねました。

電報は時間がかかるので、私は彼らが来ることにしたという返信を受け取れませんでした。私は彼らの急な旅の計画はうまくいかなかったのだろうと思うことにして、アーシュラムの日課に熱意を持って取り組み始めました。毎日午前 3 時に起床し、瞑想して、すべてのプログラムやチャンティングに参加し、そして多くの時間をセーヴァーにささげました。それは喜びに満ちた没頭でした。それでもやはり、時々私はバーバが言ったように、家族全員がその体験の中にいないことに、落ち着きのなさを感じました。

そして、私が帰る数日前の早朝、「シュリー・グル・ギター」の朗唱が終わったちょうどその時、夫と子どもたちが中庭に入ってきたのです！ 私は自分の目が信じられませんでした！ 私は家族に会えて驚き歓喜しました。私は滞在を延長することができ、皆と一緒にアーシュラムで数週間過ごすことができたととても幸せでした。

家族が到着するとすぐに、私のスケジュールは変わりました。瞑想と幾つかのアーシュラムのイベントには参加しましたが、私は毎日子どもたちと至福に満ちた多くの時間を過ごしました。子どもたちはアーシュラムにすることが大好きになり、バーバと座り、チャンティングの甘い響きを聞いて、庭にいる動物や彫像を訪れました。家族の誰にとっても、グルデーヴ・シッダ・ピートゥのバーバと一緒にこの時は、最も貴重な思い出の一つです。私たちが帰宅した時、私たちはアーシュラムの感覚も連れてきました。そして私たちは実践の一部も連れてきて、毎日瞑想とチャンティングの時間を持ちました。この体験は、私たちの家庭生活を一変させました。

まさに直接に、バーバは私たち家族に、グルデーヴ・シッダ・ピートゥの神聖な場所で彼と一緒にいるという贈り物を与えました。なんと類まれなる恩恵なのでしょう！



© 2018 SYDA Foundation®. 著作權所有。